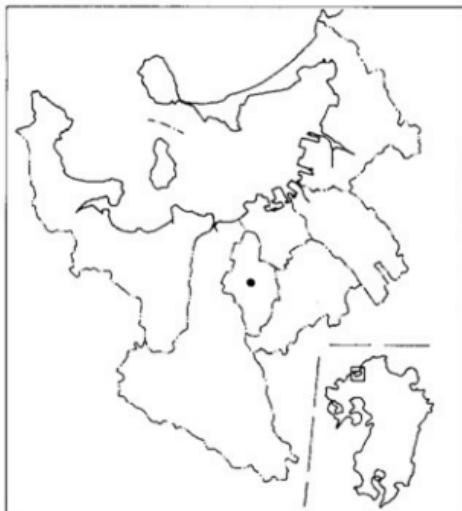


## カルメル修道院内遺跡II

—カルメル修道院内遺跡第3次調査の報告—



1 9 9 2

福岡市教育委員会

## 序

カルメル修道院内遺跡が所在する福岡市城南区神松寺地区は、近年、緑豊かな文教・住宅地区として急速に変貌をとげてきている地域です。当地周辺は、以前から多くの遺跡が知られており、このカルメル修道院内遺跡は、過去2回、修道院の改造工事に伴って発掘調査が行なわれました。発掘された弥生時代の墓から、日本最古の錫鉈が発見され、貴重な成果を得ています。

今回の発掘調査では、当遺跡で初めての完全な弥生人骨が甕棺墓から出土し、弥生時代および弥生人を研究するうえで、貴重な資料を得る事ができました。

本書が、学術及び文化財保護と活用の一助になることを願います。

最後になりましたが、株式会社大楠住宅産業、地元及び関係各位のご理解とご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

また、調査に際しまして、指導・助言をいただきました諸先生方にも厚くお礼申しあげます。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## 例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成2年9月26日から10月16日迄発掘調査を行なった、福岡市城南区神松寺3丁目1617-2地内に所在するカルメル修道院内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係の山崎龍雄が担当し、それに係る庶務は中山昭則・吉田麻由美が担当した。
3. 本書に使用した遺構図は担当者の外、溝口武司・原田圭助が作成し、遺物実測図は井上加代子と山崎が作成した。

また本書使用の写真は山崎・平川敬治が撮影した。

4. 本書使用の図面の製図は山崎・井上が行なった。
5. 本書使用の方位は磁北である。
6. 本書の執筆・編集は井上・平川の協力を得て山崎が行なった。
7. 5号甕棺墓出土の人骨については、九州大学医学部第2解剖講座の中橋孝博氏に取上げ、分析を依頼し、内容を充実した。
8. 本報告の記録類・出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。

## 本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境	1
III. 調査の記録	2
IV. まとめ	14
V. 付論 福岡市城南区、カルメル修道院内遺跡第3次調査出土弥生人骨	16

## 挿図目次

Fig. 1 カルメル修道院内遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
Fig. 2 調査区周辺現況図 (1/2,000)	3
Fig. 3 調査区遺構配置図 (1/150)	4
Fig. 4 S T01・04・06・07 (1/30)	6
Fig. 5 S T01・05発掘実測図 (1/10)	7
Fig. 6 S T02 (1/30)	8
Fig. 7 S T04・07発掘実測図 (1/6)	8
Fig. 8 S T05 (1/30)	9
Fig. 9 S T06発掘実測図 (1/10)	10
Fig. 10 S K03・08・11 (1/30・1/40)	11
Fig. 11 S K10・12・13 (1/30)	12
Fig. 12 S K14・15 (1/30)	13
Fig. 13 カルメル2次調査出土遺物	15
表 1 カルメル修道院内遺跡第3次調査要項	1
表 2 発棺墓一覧表	9
表 3 七坑・土墳墓一覧表	14

P L 1 (1) ST-05(♀・老年) (2) ST-07号(♂・熟年)遺存部位

P L 2 (1)調査区全景(南東から) (2)発棺墓検出状況(南から) (3)東側拡張区(北から)

P L 3 (1)S T01(西から) (2)S T02(西から) (3)S T04(西から) (4)S T06(北西から) (5)S T05(北から) (6)同人骨出土状況(東から) (7)ST07(南から)

P L 4 (1)S K03(南東から) (2)S K08(南東から) (3)S K11(南から) (4)S K12(西から) (5)S K13(北から) (6)S K14(東から) (7)S T01

P L 5 S T04・05・07

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過及び調査の体制

今回の調査区は昭和49・51年に調査が行なわれたカルメル修道院内遺跡の東端部に位置しており、現況は山林であった。昭和63年に当調査区に高層の共同住宅建設計画が立案され、その為の事前調査願いが埋蔵文化財課に提出された。本課事前審査班が試掘調査を行ない、甕棺墓を検出した。その後その取り扱いについて原因者と協議を行ない、調査費用を原因者が負担するという事で話がまとまった。

発掘調査は平成2年9月26日から10月16日迄実施し、整理及び報告書作成作業は平成3年度実施した。

### 調査の体制

調査委託者 株式会社 大楠住宅産業

調査主体 福岡市教育委員会教育長 井口雄哉

調査総括 埼玉文化財課長 柳田純孝(旧) 折尾 学(現)

第1係長 飛高憲雄

調査庶務 第1係 中山昭則 吉田麻由美

調査担当 第1係 山崎龍雄

調査・整理補助 清口武司 平川敬治 井上加代子

調査・整理作業 吉村哲美 濑戸啓治 原田圭助 柴田勝子 庄野崎ヒデ子 土斐崎初菜  
平井和子 藤崎久子 堀川ヒロ子 宮原邦江 吉岡田鶴子 若狭暎代

なお調査・整理作業にあたっては依頼者の大楠住宅産業をはじめ、多くの人々に協力と理解を得ました。記して感謝の意を表します。

また、調査に係る要項は下表のとおりである。

表1 カルメル修道院内遺跡第3次調査要項

遺跡調査番号	9038	遺跡略号	KMS
調査区地番	城南区神松寺3丁目1617番2	分布地図番号	七隈74
申請期間	4262.0m <sup>2</sup>	調査対象面積	331.42m <sup>2</sup>
調査期間	1990年9月26日～10月16日	事前調査番号	63 2-230

## II. 遺跡の立地と歴史的環境とこれまでの成果

### 1. 立地と歴史的環境

**立地** 博多湾に北面して扇形に展開する福岡平野は、東は三郡山地とそれより派生する山塊、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、南は脊振及び油山山塊によって限られている。更にこの福岡平野は鴻の巣山（標高100m）を中心とする鴻の巣丘陵によって分断され、西側を西福岡平野（早良平野と樋井川谷底平野）、東側を狹義の福岡平野と個別呼称されている。<sup>注1</sup> カルメル修道院内遺跡は西福岡平野の東側にある油山山塊から北に広がる低丘陵上に立地する。この丘陵は油山を水源とする樋井川・駄ヶ原川・片江川・一本松川などの中小河川によっ開析され、複雑に入り組んだ狭い谷と尾根を形成している。この地域は地形的には一つのまとまりを持った地域であり、他地域と同様多くの遺跡の存在が確認されている。しかし都心に近い事もあって、この丘陵は古くから住宅地として開発が進み、すでに消滅した遺跡も多く、今までの調査件数はそれ程多くない。

**歴史的環境** 紙面の都合もあって詳述は出来ないが、当地域の歴史は旧石器時代から始まる当遺跡や神松寺遺跡では、尖頭器が1点づつが出土している。縄文時代では片江の五ヶ村池遺跡や柏原遺跡などがある。弥生時代では神松寺遺跡・田烏尾子森遺跡・淨泉寺遺跡・小笠遺跡・飯倉丸尾遺跡などがある。飯倉丸尾遺跡では、昭和38年の調査で前期末の金海式甕棺墓から細形銅剣が1振り、平成3年度の調査では銅剣や鉄製の素環頭大刀などが出土している。<sup>注2</sup> 古墳時代には丘陵上に古墳が分布する。前期古墳としては京ノ隈古墳や千隈古墳があり、後期になると、梅林古墳や神松寺御陵古墳などを中心として、群集墳が分布する。また集落遺跡としては片江辻遺跡などがある。歴史時代になると、当地域は早良郡の毗伊郷となり、京ノ隈遺跡などの経塚遺跡や笠栗古代製鉄遺跡、柏原遺跡などがある。

### 2. これまでの調査成果

**第1次調査** 昭和49年1月。弥生時代前期末から中期初頭の甕棺墓を2基記録した。1基は成人用の合せ口甕棺、他の1基は小児用棺である。

**第2次調査** 昭和51年7月。甕棺墓3基、木棺墓6基を検出した。金海式の甕棺墓に切られる小児用木棺墓から鎌釧が3個出土した。<sup>注3</sup>



Fig. 1 カルメル修道院内遺跡周辺道路分布図 (1/50,000)



Fig. 2 調査区周辺現況図 (1/2,000)

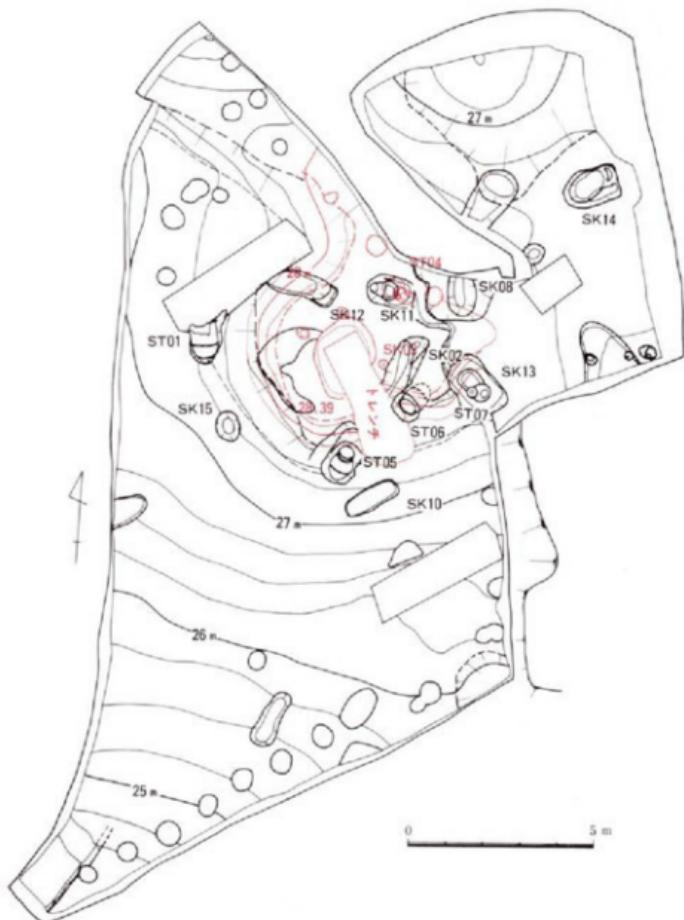


Fig. 1 通路地名

- |               |            |
|---------------|------------|
| 1. カルメル修道院内通路 | 11. 片江辻遺跡  |
| 2. 淨泉寺通路      | 12. 宝台遺跡   |
| 3. 神松寺通路      | 13. 丸毛古墳群  |
| 4. 田鳥尾子森遺跡    | 14. 管渠遺跡   |
| 5. 京ノ原遺跡      | 15. 七頭古墳群  |
| 6. 銀倉丸毛遺跡     | 16. 大谷古墳群  |
| 7. 飯倉C遺跡      | 17. 倉瀬戸古墳群 |
| 8. 千隈熊添古墳     | 18. 片江古墳群  |
| 9. 五ヶ村池遺跡     | 19. 早苗田古墳群 |
| 10. 梅林古墳      | 20. 鳥越古墳群  |

Fig. 3 調査区構造配置図 (1/150)

### III. 調査の記録

#### 1. 調査の概要

調査区は試掘調査によって甕棺墓を検出した、標高29mを測る丘陵頂上部を中心に設定した。調査は重機による表土除去から始まった。遺構面は褐色土及び明褐色土下、30cm位の所で検出した明赤橙色から灰白色の花崗岩バイラン土である。遺構は標高28~29mの頂上部を中心とした範囲で検出した。検出した遺構は甕棺墓6基、土坑及び土壙墓9基である。土坑・土壙墓の一部は頂上部を中心とした、だめ押し作業で検出した。SK14は調査区を一部東へ拡張した部分で検出した。

#### 2. 遺構と遺物

##### 甕棺墓

S T01 (Fig 4, PL 3) 調査区北西側で検出した單棺の成人棺である。大形の變形土器を用いている。甕棺墓の主軸はN-7°-Wに取り、ぎりぎりの墓壙の中に南壁にさし込むように、少し上に角度を持って埋置している。恐らく木蓋などの蓋をしていたのだろうが、その痕跡は確認出来なかった。

出土遺物 (Fig 5, PL 4) 1は口径73.8cm、底径13.2cm、器高112.8cmを測る大形の變形土器で、胴部最大径は上半にある。く字状の口縁部を持ち、口唇部には浅い凹線が巡る。口縁直下に1条の三角突帯、胴部下半に2条のコ字状の突帯が巡る。胴部外面はヨコナデ、内面はナデで、胴外面下半にはヘラ状の工具痕が残る。また黒斑もある。胎土は石英、長石の小粒を多く含み、焼成は良好である。

S T02 (Fig 6, PL 3) S T01南側で検出した。規模が長さ0.82m、幅0.59m、深さ0.29mを測る不定形の土壙の中に、小児用の變形土器の破片がちらばっていた。小児用の甕棺墓であったと思われる。破片は絆片が多く、形態を復元しえなかった。

S T04 (Fig 4, PL 3) 頂上の明橙色粘土面で検出した小児用の合せ棺である。上下共に丹塗りの變形土器を用いている。墓壙は平面形が楕円形を呈し、規模は長径0.56m、短径0.39m、深さ0.46mを測るが、西側は搅乱を受けている。甕棺は主軸をN-80°-Wに取り、急角度を持って墓壙内に埋置されている。目貼り粘土・副葬品等はなかった。

出土遺物 (Fig 7, PL 5) 4は上焼として用いられた變形土器で、口径30.4cm、底径7.2cm、器高28.5cmを測る。胴部最大径は胴部上半にある。口縁部は逆L字形を呈し、口端部を丸くおさめる。頸部にはM字状の突帯、胴部に2条のM字形突帯が付く。胴部下半に不定形の孔が焼成後に穿たれる。外面は残りは悪いが丹塗りで、ヨコ方向のヘラ研磨、内面はナデ調整

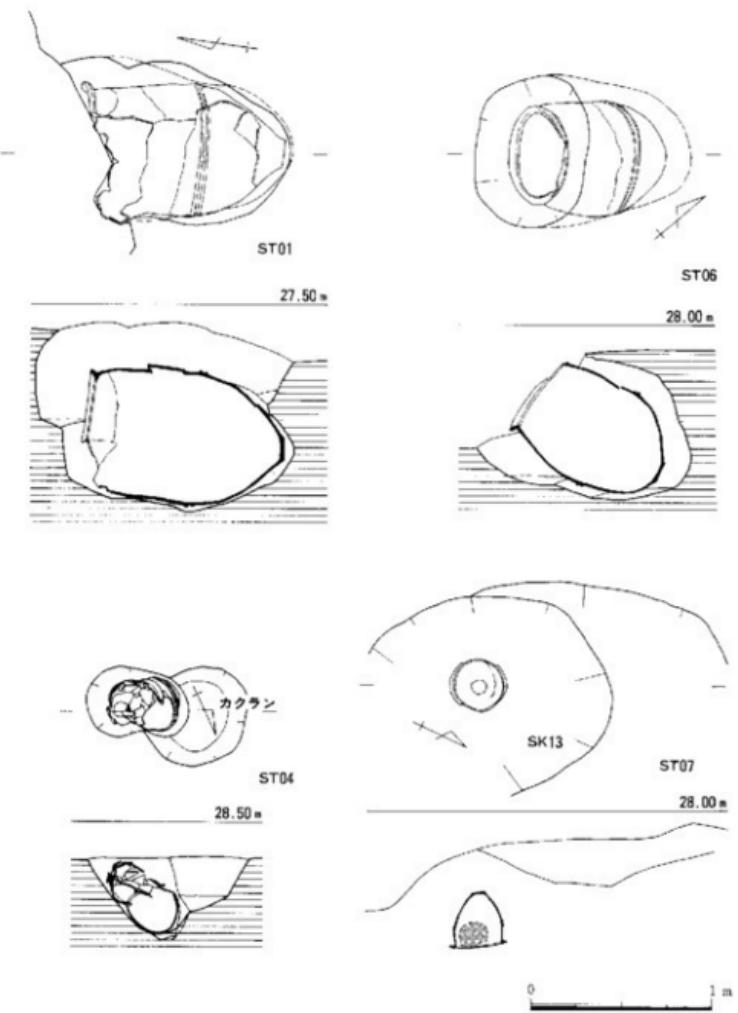
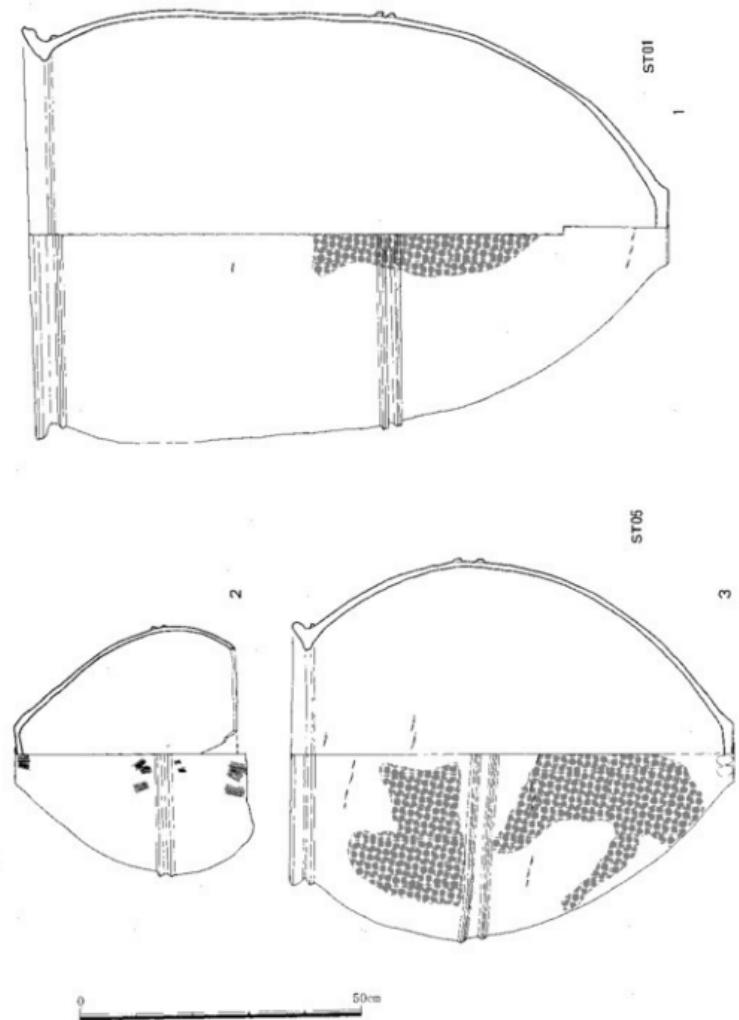


Fig. 4 ST01+04+06+07 (1/30)

Fig. 5 ST01+05 燈火測図 (1/10)



で、底部と口縁直下に指おさえ痕が残る。5は下腹の壺形土器で、口径27.5cm、底径8.5cm、器高31.5cmを測る。胴部最大径は上半にある。口縁部はく字状を呈し、端部は丸く肥厚する。胴部中央に三角突帯が1条巡る。胴外面はやや荒れるが丹塗りで、上半には粗いハケ目、内面はナデを施す。胎土はいずれも1~3mm程度の砂粒を含み、焼成は良好である。

S T05 (Fig. 4、PL 3) 頂上部の南側で検出した呑口の成人棺である。上下とも壺形土器を用いるが、上蓋は口縁部を打欠いて用いている。墓壙の平面形は橢円形を呈し、規模は長径1.58m、短径で0.92mを測る。號棺は主軸をN

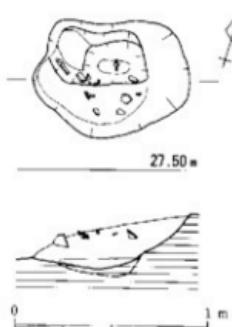


Fig. 6 ST02 (1/30)

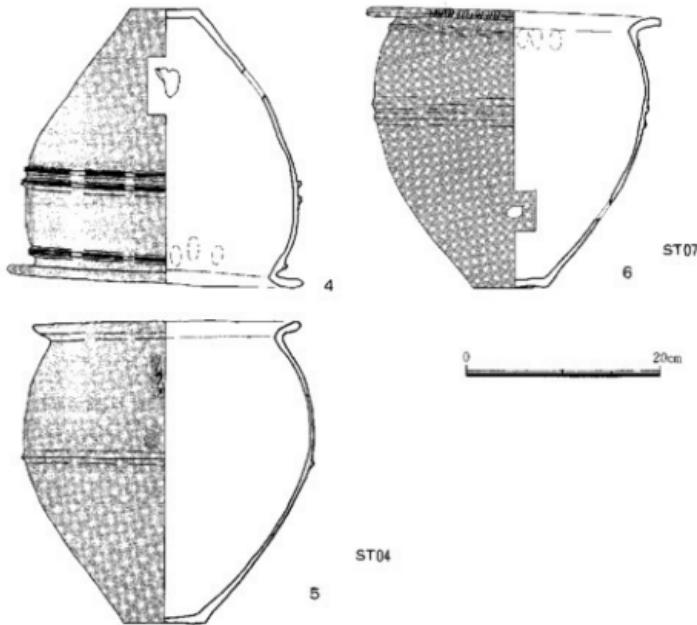


Fig. 7 ST04-07 製 実測図 (1/6)

—20°—Eに取り、かなりの角度を持って、墓壇内に埋置している。目貼り粘土はなかった。甕棺内には土がほとんど入っておらず、下甕底面には女性と思われる人骨が良好な状態で遺存していた。

**出土遺物 (Fig 5、PL 5)** 2は上甕用の甕形土器。口縁部は打欠かれ不明だが、恐らく下甕と同様の形態であったと思われる。器高は現存で40.8cm、底径10.2cmを測り、胴部最大径は上半にある。胴部には2条の三角突帯が巡る。底部はやや上げ底である。外面は丹塗りでナナメの刷毛を、内面は器壁は荒れるがナデを施す。3は下甕用の大形の甕形土器。全体にややひずむが口径46.2cm、底径10.4cm、器高79.9cmを測り、口径と底径は胴部最大径の割には小さい。口縁部は内傾の強い逆L字形を呈し、その直下に1条の三角突帯、胴部上半に2条のコ字状の突帯が巡る。胴部内外面はナデであるが、ヘラ状の工具痕が残る。外面には黒斑がある。胎土いずれも1~2mm前後

表2 甕棺墓一覧表

(数字単位cm)

	掘方長	掘方幅	掘方深	方 位	埋置角度	組合せ	合口形式	棺 長	時 期	備 考
ST01	141	97	107	N—7°—W	7°	甕		114	中期末	
ST04	56	39	46	N—80°—W	58°	甕+甕	呑口	52	〃	
ST05	158	92	92	N—20°—W	33°	甕+甕	呑口	116	後期初頭	熟年女性の人骨
ST06	125	85	82	S—41°—W	34°	甕		85	〃	
ST07	不明	不明	不明			倒置	甕		中期末	成人頭蓋骨あり

\* ST02は破壊が著しく、詳細が不明の為削除した。

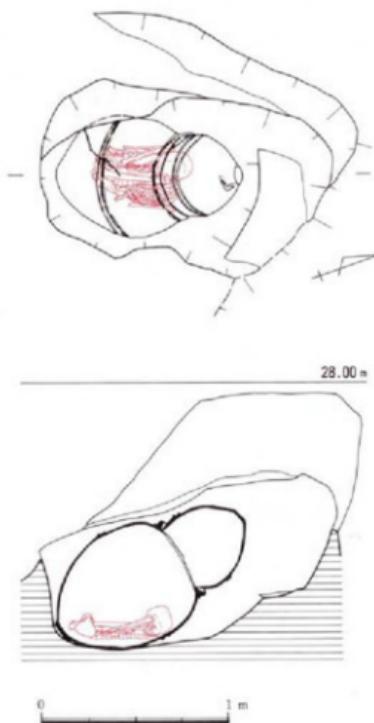


Fig. 8 ST05 (1/30)

の石英・長石粒を含み、焼成は良好である。

S T06 (Fig 4, PL 3) S T05の東側で検出した成人用の單棺の甕棺墓である。墓壇は平面形か橢円形を呈し、規模は長径1.25m、幅0.85mを測り、地面に斜めに掘り込んでいる。甕棺は主軸を S-41°-W に取って、角度を持って埋置されている。蓋や目貼り粘土等は確認出来なかった。

出土遺物 (Fig 9, PL 5) 7は大型の變形土器で、全体の形態はややひずんだ俵形を呈す。口径53.6cm、底径12.1cm、器高82.2cmを測る。底部は胴部の割には小さく、やや凸レンズ状の平底。頭部はしまり、口縁部は内傾する逆L字形を呈す。頭部には1条の三

角突帯、胴部下半には幅1.5cmの三角突帯が巡る。胴内外面共ナデ仕上、外面には黒斑がある。胎土は1~5mmの石英・長石粒を混入し、焼成は良好である。

S T07 (Fig 4, PL 2) S K13の上面で確認した小児の甕棺墓である。丹塗りの變形土器を倒置しており、その中には赤褐色砂と共に人間の頭蓋骨片が入っていた。墓壇は確認出来なかったが、S K13より新しい時期のものである。

出土遺物 (Fig 7, PL 4) 6は丹塗りの變形土器で、口径30.4cm、底径7.6cm、器高29.0cmを測り、胴部最大径は上半にある。口縁部はく字状に外反し、口唇部にはかるい凹線があり、刻目がある。口縁直下に1条、胴部上半に2条の三角突帯が巡る。胴部下半に直径1.9cm位の穿孔がある。胴外面は上半がヨコ方向、下半がタテ方向のヘラ研磨、内面はナデを施し、頭部内面と内底部には指おさえ痕が残る。胎土は径1~2mmの小砂粒を含み、焼成は良好である。

#### 土坑及び土壙墓

S K03 (Fig 10, PL 4) 頂上部で検出した平面形が卵形を呈する土坑。規模は長径2.22m、短径1.64m、深さは最大で1.06mを測る。壁面はほぼ直立し、底面は水平である。主軸は N-1°-W に取る。埋土は上層で赤褐色粘土に黄褐色土を少し混入するが、全体にかたくしまる。下層は底に薄く堆積するのみであるが、黄白色花崗岩バイラン土と明礬色粘土の混合土である。出土遺物はなかった。

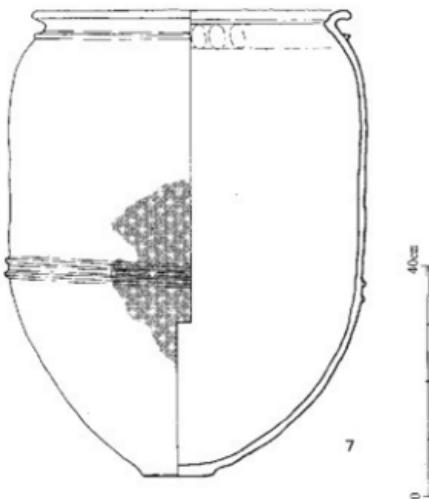


Fig. 9 ST06 甕 実測図 (1/10)

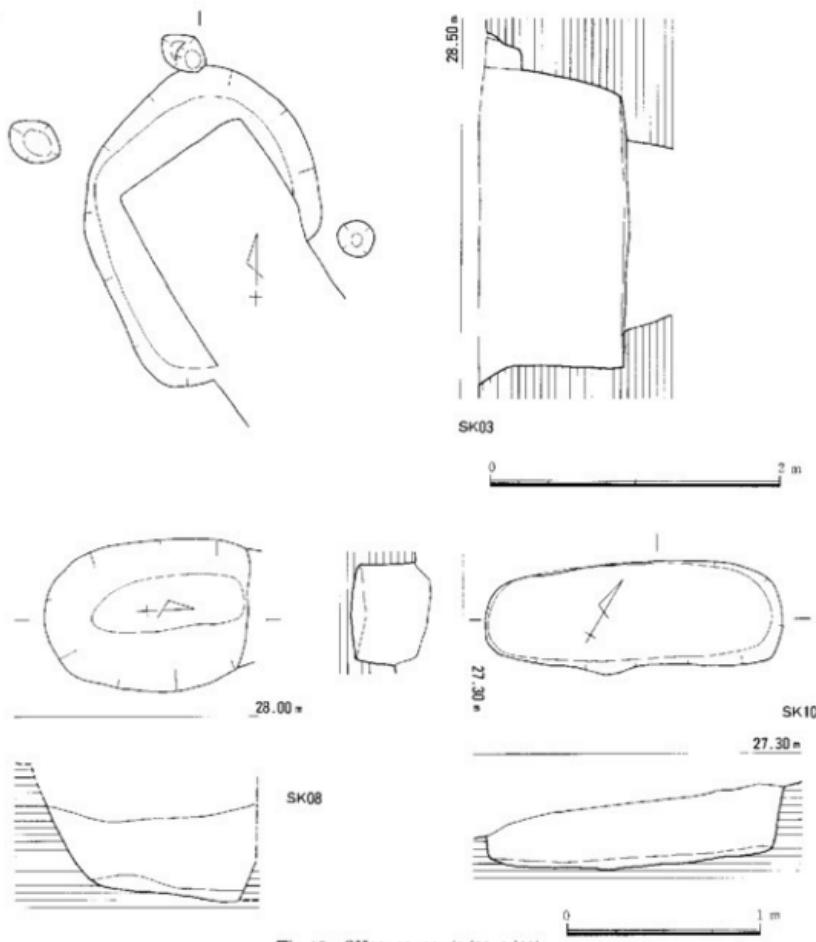


Fig.10 SK03・08・11 (1/30・1/40)

**SK08 (Fig.10, PL.4)** 北側境界地で、橙色の遺構面を一段掘り下げた所で確認した土坑である。平面形は小判形を呈し、規模は現状で長径1.07m以上、短径0.81m、深さ0.65mを測る。壁の立ち上りは緩やかで、断面は逆台形を呈す。主軸はN-27°-Eに取る。埋土は明赤褐色粘土ブロックで、余りしまらない。遺物は出土しなかった。

**SK09** SK03の東側で検出した、幅80cm前後、断面V字形の溝状を呈する上坑。埋土は亦

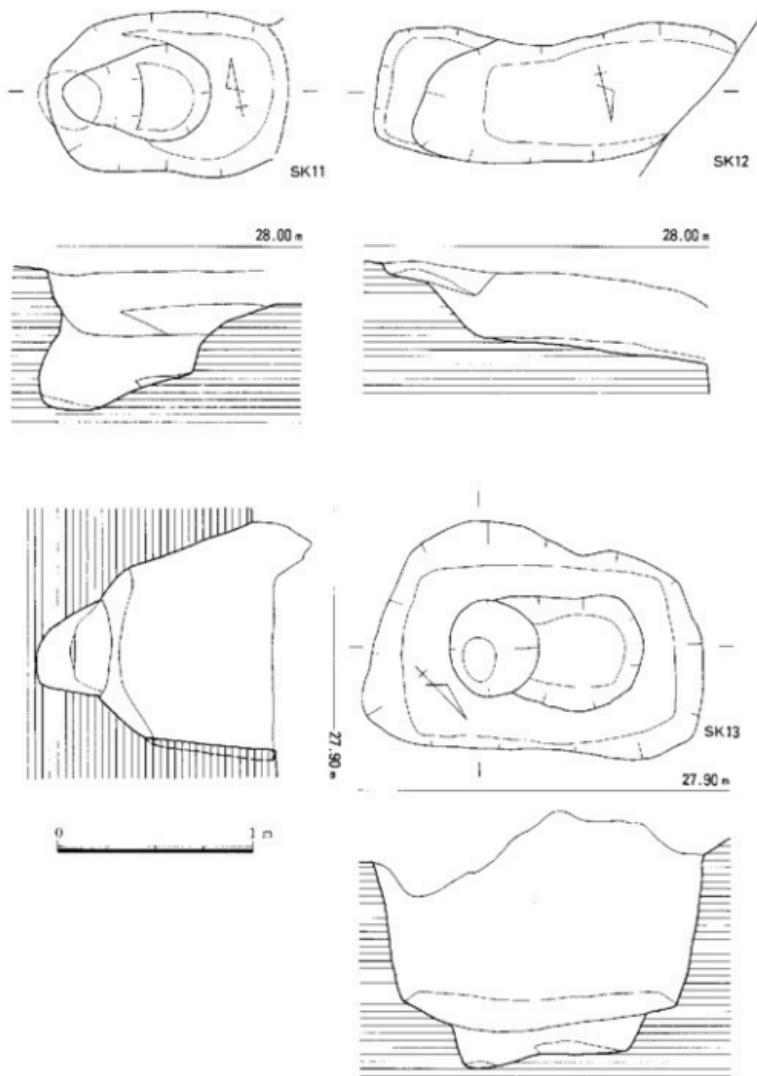


Fig.11 SK10-12-13 (1/30)

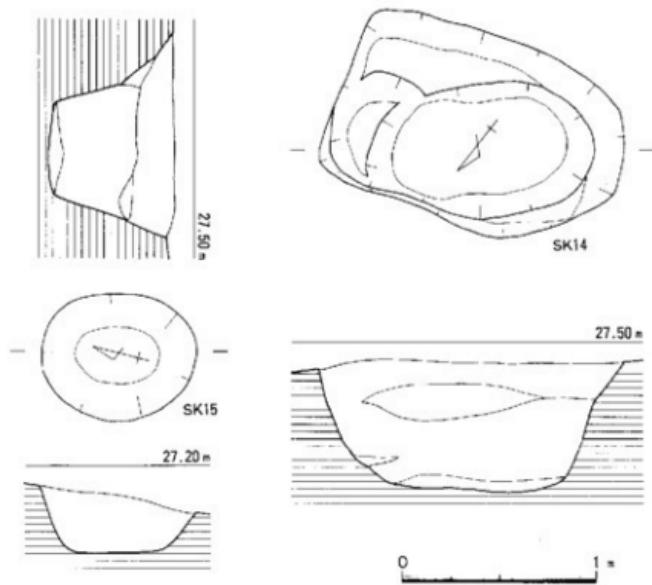


Fig.12 SK14・15 (1/30)

褐色粘土で、黄白色バイラン土の地山面下にもぐり込んでいたので、完壠を断念した。明確な遺構ではない。

**S K10 (Fig11)** 頂上部南側で検出した、主軸をN-59°30'-Eに取る土壙で、形態から土壙墓とする。平面形は隅丸長方形で、規模は長さ1.54m、幅は北東小口で0.54m、南西小口で0.41m、深さは現存で0.30mを測る。壁面はほぼ直立し、底面は北西から南東に緩やかに下傾する。埋土は赤褐色粘土と灰白色花崗岩バイラン土の混合土で、全体に柔らかく、しまっていない。出土遺物はない。頭位は形態から北西側であろうか。

**S K11 (Fig10、PL 4)** 頂上部北側で検出した。主軸をN-79°-Wに取る土壙墓。だめ押し作業で確認したので、東側の立ち上がりが不明である。墓壙はまず、長径1.19m以上、短径0.87m、深さ0.32mの規模で椿円形状に掘りこぼめた後、西側寄りに長径0.88m、短径0.55m、深さ0.5mの東側に最大幅0.27mのテラスを持つ平面椿円形のピットを掘り込んでいる。深さは最深で0.71mを測る。埋土は赤褐色粘土を主体とする。出土遺物はなかった。

**S K12 (Fig11、PL 4)** 西端をトレンチに切られる。主軸をN-78°-Wに取り、平面形が

表3 土坑・土壤墓一覧表

(数字単位:cm)

	平面形	断面形	長さ	幅	深さ	方位	出土遺物	時代	備考
SK03	郎形	箱形	222	164	106	N-1'-W	なし	不明	
SK08	小判形	逆台形	107.5	81	65	N-27'-E	"	"	
SK09	構状	V字形	不明	80前後			"	"	
SK10	隅丸長方形	逆台形	154	41-51	30	N 59°30'-W	"	"	土壤墓
SK11	横円形	2段掘	(119)	87	71	N-79'-W	"	"	
SK12	不整長方形	逆台形	195	65	37	N-78'-W	"	"	
SK13	隅丸長方形	箱形	180	108	114	N-47°30'-W	"	中堅後当付焼	ST07に切られる。土壤墓。
SK14	不整長方形	2段掘	161	110	67	(N-55-W)	"	不明	東側と西側にテラスを持つ
SK15	横円形	逆台形	81	68	35	N-16'-W	"	"	

不整長方形を呈す土壤墓である。規模は長さ1.95m、幅0.65m、最大深0.37mを測る。東側に幅15~30cmのテラスを持ち、底面は緩やかに東に傾斜している。埋土は黄褐色から赤褐色土で、出土遺物はなかった。

S K13 (Fig11, PL 4) S T07の下で検出した土壤墓。主軸をN-47°30'-Wに取り、平面形は隅丸長方形を呈し、底面に横円形容の掘り込みがある。規模は底面迄の部分で、上面で長さ1.80m、幅1.08m、最大深1.14m、底面の掘り込みの規模は1.13×0.58m、深さは0.23mを測り、南側が円形ピット状に少し深くなっている。壁面の立ち上りはやや急である。埋土は明褐色土と赤褐色土の混合に灰白色花崗岩バイラン土を少し混入する。全体にしまらず、フワフワしていた。出土遺物はなかった。

S K14 (Fig12, PL 4) 東側拡張区で検出した土壤。平面形は不整長方形を呈し、規模は長さ1.61m、幅1.10m、最大深0.67mを測る。東側と南側にテラスを持ち、北西側が、横円形容に一番深くなっている。壁の傾斜は比較的緩やかである。埋土は上層がややくらい灰赤色花崗岩バイラン土、下層は黄褐色から赤褐色粘土ブロックで、余りしまっていない。出土遺物はなかった。形態から土壤墓であろうか。

S K15 (Fig12) 頂上部西側で検出した、主軸をN-16'-Wに取る土壤。平面形は横円形を呈し、規模は長径0.81m、短径0.68m、深さ0.35mを測る。壁断面は緩やかな逆台形容を呈す。埋土は黄褐色土で、赤褐色土ブロックを少量含むが、全体に軟質で、しまっていない。出土遺物はなかった。

## IV. まとめ

今回の調査成果は以下の4点が上げられる。

- ① 今回の調査で、遺跡の東限が確認出来た。從来第1・2次調査の成果及び現地踏査などによって、遺跡の範囲はほぼカルメル修道院内に収まると考えられていたが、今回の調査で東へ35m程拡がる事が判明した。
  - ② 遺跡の年代は、今回の成果によって、弥生時代前期後半代から、後期初め頃迄の時期に及ぶことが判った。当遺跡は樋井川流域の弥生時代遺跡としては、淨泉寺遺跡や田島尾子森遺跡などと共に、最も古い時期のものである。しかも、当遺跡は墳墓だけで構成されており、周辺の遺跡との関係が注目されるところである。
  - ③ S T05出土の人骨は、老年域の女性人骨である。樋井川流域では、初めての出土であり、貴重な資料を得る事が出来た。
  - ④ S T07には頭骨のみが埋葬されていた。これは特異な埋葬形態である。人骨の項でも詳しく述べられているが、当時の風俗習慣を考える上での一つの事例となろう。市内では同様の出土例が藤崎2次調査に1例見られる。
- 今回の調査は小範囲の調査としては、充分な成果を得る事が出来た。唯、紙面の都合上、また筆者の不勉強から充分な検討を加える事が出来なかった。尚、九州大学医学部の中橋先生には、公務でお忙しい中、人骨調査でお手を患わせた。末尾ながら記して感謝する次第です。
- 注1. 福岡市都市整備局「福岡市土地分類細部調査報告書」 1988  
 注2. 調査担当の小林義彦氏のご教示による。  
 注3. 福岡市教育委員会「福岡市カルメル修道院内遺跡報」「京ノ隈遺跡」 1976  
 注4. 昭和52(1977)年調査。担当者の井沢洋一氏のご教示による。

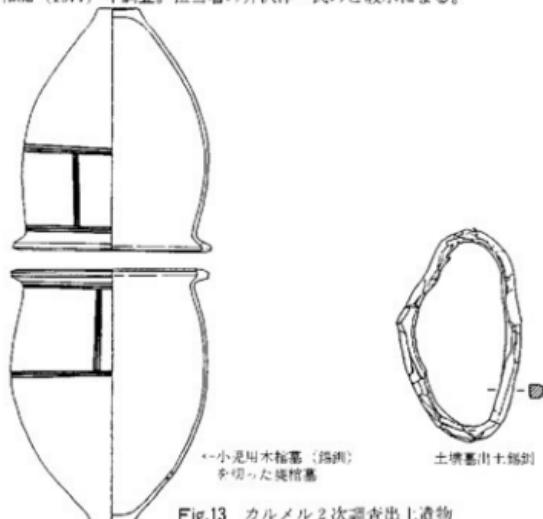


Fig.13 カルメル2次調査出土遺物

(埋蔵文化財研究会第20回研究集会資料『弥生時代の青銅器とその共伴関係』より転載)

## V. 付 論

### 福岡市城南区、カルメル修道院内遺跡第三次調査出土弥生人骨

中橋孝博（九州大学医学部第一解剖）

#### はじめに

近年、北部九州各地から甕棺墓埋葬の弥生人骨の出土が相次ぎ、その形態的特徴や地域性などの全容が明らかにされつつあるが、同時にまた、当時の社会状勢や埋葬習俗を窺う上で参考とすべき事例も着実に蓄積されている。福岡市の南西部に位置するカルメル修道院内遺跡の甕棺墓から、今回また、そうした興味深い埋葬例が出土した。得られた資料は限られたものであるが、当地の弥生社会復元に資する貴重な追加資料になると思われる所以、以下にその検討結果を報告する。

#### 資料・方法

遺跡：カルメル修道院内遺跡は、福岡市の南西部、城南区神松寺3丁目の丘陵上に位置する。1974年と1976年に計二次の調査がなされた後、今回、1990年9月から10月にかけて、隣接地の宅地造成に伴う第3次調査が実施された。過去の調査では、甕棺を中心とした埋葬遺構のみが検出されていたが、今回新たにまた5基の甕棺が追加された。

資料：2基の甕棺内に入骨が遺存していた（表1）。今回出土の甕棺はいずれも中期末から後期始めに属し、2体の人骨も中期末ないし後期初頭のものである。後述するように、内1体は、大人の頭蓋のみを小児棺内に埋葬した事例である。

計測は主に Martin-Saller (1957) に従い、その他、Howells (1973)、鈴木 (1963) の方法によった。顔面平坦度の計測は山口 (1973) に従い、また、性判定には筆者らの方法 (Nakahashi & Nagai, 1986) を援用した。

表1 カルメル修道院内遺跡出土弥生人骨

番号	性	年齢	時 代	甕棺	遺存部位	抜歯	備考
ST-05	女	老年	弥・後期初	成人棺	ほぼ全身	なし	
ST-07	男?	老年	弥・中期末	小児棺	頭蓋のみ	?	

#### 結 果

##### 1. ST-05号人骨（女性・老年）

右前腕部など、一部を欠くが、その他はほぼ良好な状態で遺存している。

主に恥骨形態等から女性とみなされ、また、恥骨結合面、歯の咬耗、縫合の癒合状態等から、既に老年に達した女性とみなされる。

### A. 頭蓋 (図1、表2)

頭蓋冠では、北部九州弥生人の平均（中橋・永井、1989）に較べて頭長業がやや短いが、頭幅は大きく、その頭長幅示数が短頭型（81.0）に入る点が目を引く（図1）。また頭高もかなり低い。

図1. モリソンの偏差折線（中心線：北部九州弥生）

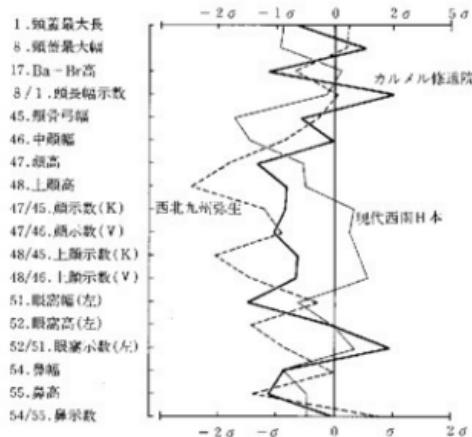


表2 主要頭蓋計測値の比較（女性）

	カルメル (弥生)		北部九州・山口 <sup>1)</sup> (吉備)		西北九州 <sup>2)</sup> (弥生)		広田 (弥生)		津雲 <sup>3)</sup> (弥生)		西南日本	
	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1) 頭蓋最大長	174	132	176.7	37	175.6	15	178.1	22	159.7	39	175.9	57
2) 頭蓋最大幅	141	135	137.9	33	137.3	15	139.3	23	144.4	41	141.2	57
3) Ba-Hr 高	125	104	130.5	30	129.6	7	127.3	8	127.1	28	127.1	57
4) 頭長幅示数	81.0	117	78.0	28	78.5	15	78.2	18	90.2	37	80.2	57
5) 頭長高	71.8	99	73.8	27	74.2	7	71.2	7	79.9	28	72.2	57
6) 頭高	88.7	94	94.7	21	93.9	7	92.5	8	90.4	27	89.5	57
7) 頭高幅	129	94	131.4	27	131.2	6	130.2	4	126.0	15	132.6	57
8) 中頭幅	100	100	100.0	31	100.4	11	95.9	6	91.8	21	99.6	57
9) 頭高	(108)	71	115.1	15	110.4	9	104.9	4	105.3	21	106.2	14
10) 上頭高	67	96	69.5	33	67.7	12	60.9	4	62.0	23	62.6	55
11) 頭高幅小数	83.7	59	87.5	13	83.7	6	81.7	3	81.1	11	80.1	14
12) 頭高幅示数 (K)	108.0	65	115.3	12	109.2	9	109.5	4	110.8	15	108.9	14
13) 上頭高示数 (K)	51.9	77	53.0	23	51.7	6	47.6	3	47.9	11	47.6	55
14) 上頭高示数 (V)	67.0	86	69.5	27	67.7	11	63.5	4	65.3	15	63.8	55
15) 頭高幅示数 (左)	39	98	41.6	31	41.3	10	41.1	4	39.3	18	41.9	57
16) 頭高幅示数 (右)	34	97	33.9	34	33.9	10	31.2	4	30.3	14	33.8	57
17) 頭高幅示数 (左)	87.2	94	81.5	31	82.2	10	75.9	4	77.7	14	81.5	57
18) 頭高幅示数 (右)	25	105	26.4	32	25.9	12	26.6	5	24.8	26	25.4	57
19) 頭高	47	104	49.6	32	48.5	12	46.3	4	44.0	25	46.2	57
20) 頭高	53.2	100	53.3	30	53.8	12	57.4	4	58.0	23	54.7	57
21) 頭高示数	54/55											

1) 中橋・永井 (1989)、2) 内藤 (1971)、3) 津川 (1988)

顔面はやや低く、各顎、上顎示数も周辺域の弥生人の平均を下回るが、西北九州弥生人（内藤、1971）や津雲縄文人（池田、1988）に較べればやはり高い。また、鼻型は当地の他の弥生人の平均に近いが、眼窓は著しく高眼窓型に傾く。鼻根部は偏平で（鼻根弯曲示数：90.5）、顔面には全体的に強い偏平性が認められる。

歯式を以下に示すが、風習的抜歯の痕跡は認められない。

$$\times \times M^1 P^2 \bigcirc C I^2 I^1 \quad | \quad \bigcirc I^2 \bigcirc \times P^2 M^1 \times \times$$

$$M_3 \times \times \times P_1 C I_2 I_1 \quad | \quad I_1 I_2 C P_1 \times \times \times M_3$$

(○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖)

#### B. 四肢骨（表3、4、5）

全体的に、北部九州弥生人としてはやや短く、ピアソン法に基づく推定身長は148.7cmと、幾分低身長である。

骨幹部では尺骨や大腿骨の断面型に少し変異がみられるが、諸径は北部九州の平均値と大差ない。また、胫骨・大腿骨示数は80.3で、金環（79.4）に近く、縄文人（津雲：83.5）に較べて明かに小値をとる。

表3 上肢骨計測値（女性、左）

	カルメル (弥生) ST-5	北部九州 (弥生) N M		山 口 (弥生) N M		大 友 <sup>11</sup> (弥生) N M		津 雲 <sup>12</sup> (縄文) N M		九 州 <sup>13</sup> (現代) N M		
		長	幅	長	幅	長	幅	長	幅	長	幅	
<b>上腕骨</b>												
1	最 大 長	—	11	283.2	31	284.4	4	262.3	21	264.4	36	271.7
2	全 長	—	8	282.3	29	279.4	4	257.8	19	259.6	36	268.6
5	中 突 大 径	21	35	21.0	43	20.4	20	21.0	40	19.7	36	19.8
6	中 突 小 径	15	36	15.3	43	15.4	20	15.8	41	14.0	36	14.8
7	骨 体 最 小 径	55	47	56.9	49	56.0	19	57.6	42	53.9	36	54.8
7a	中 突 周	63	38	60.7	41	59.1	19	61.8	40	56.5	36	56.9
6/5	骨 体 断面示数	71.4	35	73.2	43	75.9	20	75.9	40	71.3	36	73.3
7/1	長 厚 示 数	—	11	19.8	31	19.6	11	22.4	21	20.4	106	20.9
<b>橈 骨</b>												
1	最 大 長	(210)	17	215.1	21	219.1	2	207.0	24	208.2	12	199.2
2	機 能 長	—	11	204.3	20	208.2	2	194.0	26	196.4	12	187.0
3	最 小 周	37	52	37.9	36	37.4	9	40.4	30	36.4	12	34.7
4	骨 体 橫 径	17	56	15.7	39	15.4	11	16.4	34	14.6	12	14.5
4a	骨 体 中央矢径	15	24	14.3	28	14.2	11	15.9	—	—	12	13.5
5	骨 体 矢 状 径	11	56	10.9	39	10.4	11	11.2	34	9.8	12	9.7
5a	骨 体 中央矢径	12	24	10.8	28	10.6	12	10.9	—	—	12	9.7
3/2	長 厚 示 数	—	11	17.7	19	17.9	1	19.7	25	18.2	11	18.1
5/4	骨 体 断面示数	64.7	56	69.3	39	68.1	11	68.7	34	67.5	10	68.3
5a/4a	中 突 断面示数	80.0	24	75.7	28	75.2	11	69.7	—	—	—	—
<b>尺 骨</b>												
1	最 大 長	(226)	6	236.5	24	236.9	1	223.0	12	227.2	12	215.0
2	機 能 長	203	8	207.6	25	208.0	2	207.0	12	198.6	12	189.2
3	最 小 周	31	34	34.4	30	34.2	7	33.9	24	32.8	12	32.1
11	矢 状 径	11	54	11.2	41	11.3	12	12.8	37	11.3	12	10.9
12	橫 径	13	54	16.0	41	15.5	11	15.9	37	13.6	12	13.9
3/2	長 厚 示 数	15.3	7	16.5	25	16.4	2	16.7	12	16.4	12	16.8
11/12	骨 体 断面示数	84.6	54	70.4	41	73.4	11	82.0	37	83.5	12	77.5

1) 松下（1981）、2) 池田（1988）、3) 寺嶋（1957）、溝口（1957）

表4 下肢骨計測値(女性、左)

	カルメン ST 5 r	北部九州 (弥生) N	山口 (弥生) M	大友 <sup>1)</sup> (弥生) N	津 (縄文) M	宮 <sup>2)</sup> (現代) N	九州 <sup>3)</sup> M
大腿骨							
1 異大長	— (390)	34 405.5	30 403.9	5 386.8	22 388.2	13 380.1	
2 自然位長	— —	11 403.0	26 399.5	4 375.3	22 381.7	13 375.5	
6 中央矢状径	25 24	112 25.7	50 25.5	30 25.5	45 25.2	13 23.6	
7 中央横径	24 26	112 26.3	50 26.2	30 25.2	45 24.2	13 23.2	
8 中央周径	78 79	111 81.5	50 80.9	29 80.4	45 78.0	13 74.2	
9 骨体上横径	— 30	86 30.5	50 31.0	30 29.7	42 28.4	13 27.5	
10 骨体上矢状径	— 20	86 23.2	50 23.0	30 22.7	42 22.2	13 21.3	
8/2 長厚示数	—	11 20.8	26 20.2	4 20.3	21 20.3	13 19.8	
6/7 中央断面小数	104.2 92.3	112 98.3	50 97.5	31 102.1	45 104.5	13 102.0	
10/9 上骨断面示数	— 66.7	86 76.4	50 74.5	30 75.5	42 78.2	13 77.1	
胫骨							
1 全長	(308) (308)	29 324.3	29 326.8	3 313.0	17 319.8	14 301.0	
1a 異大先	(313) (313)	30 329.3	23 331.0	4 324.8	17 324.4	14 306.6	
8 中央最大徑	27 26	46 27.0	31 26.9	24 27.6	42 27.3	14 24.7	
8a 宽豊孔位最大徑	31 36	97 30.8	42 30.5	19 30.4	37 30.5	14 28.1	
9 中央横径	21 21	46 20.4	31 19.1	26 19.7	42 17.9	14 18.8	
9a 宽豊孔位横径	21 22	98 22.3	42 21.6	20 21.1	36 19.4	14 21.1	
10 骨体周	74 72	46 74.5	30 72.6	23 75.3	42 73.4	14 70.1	
10a 宽豊孔位周	83 82	96 83.2	42 82.2	18 81.6	35 81.3	14 78.2	
10b 肥小周	68 67	82 68.6	44 67.5	24 68.3	35 67.6	14 63.6	
9/8 中央底面示数	77.8 80.8	46 75.7	31 71.1	23 72.1	42 65.8	14 76.3	
9a/8a 宽豊孔位底面示数	67.7 73.3	97 72.4	42 71.2	18 70.4	36 65.6	14 74.9	
10b/1 長厚示数	22.1 21.8	20 21.3	20 20.3	3 21.4	17 21.1	14 21.2	
腓骨							
1 異大長	(313)	2 328.0	17 324.0	— —	8 316.9	14 300.6	
2 中央最大徑	16 15	34 14.7	29 14.8	— —	32 14.7	14 12.9	
3 中央最小徑	11 11	34 9.8	29 9.6	— —	32 10.0	14 8.6	
4 中央周径	43 41	34 40.7	28 41.0	— —	32 42.8	14 36.8	
4a 異小周	— 35	8 35.6	21 37.3	— —	20 34.0	14 32.3	
3/2 中央断面示数	68.8 73.3	34 67.3	29 65.2	— —	32 68.3	14 67.6	
4a/1 長厚示数	— 111.8	2 10.8	17 11.6	— —	8 11.0	14 10.8	

1) 松下 (1981)、2) 沢田 (1988)、3) 渡辺 (1955)、河野 (1955)

表5 推定身長の比較

	女 N	男 M
カルメンST-65 (弥)	1 148.7	
北部九州 (弥)	52 151.2	
山口 (弥)	35 147.9	
西北九州 (弥)	8 147.9	
大友 (弥)	2 149.0	
広田 (弥)	10 142.8	
北部九州 (縄) <sup>b)</sup>	6 150.5	
津宮 (縄)	23 148.1	
古胡 (縄) <sup>c)</sup>	18 147.7	
北部九州・山口 (古) <sup>d)</sup>	15 150.2	
吉母浜 (中) <sup>e)</sup>	22 146.5	

1) 右大腿骨最大長の平均値より算出、石沢 (1931)

2) 中鷹・永井 (1989)、3) 中橋・永井 (1985)

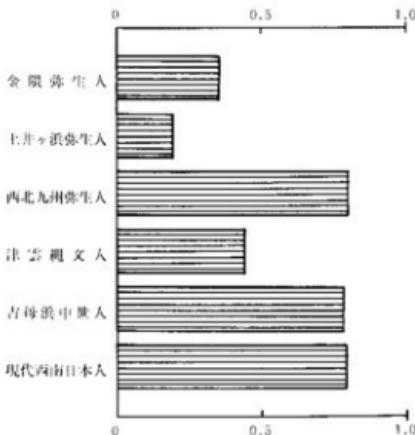
## 2. ST-07号（岡版参照）

口縁径30cm、器高29cmの小児棺中から、頭蓋片のみ（左頭頂骨、前頭骨左眼窓部等）出土した。甕棺の大きさと遺存骨の状況から考えて、頭蓋のみを小児棺に埋葬した事例と考えられる。頸椎の有無は確認出来なかった。骨の遺存状況が悪いので性別は不明確ながら、そのサイズの大きさから、男性の可能性が強く、また、縫合がかなり癒合しているので、熟年に達した個体とみなされる。

### 考 察

女性人骨(ST-05)については、その頭蓋において、短、低顎性が認められ、顔面高や身長も少し低い等、いわゆる「渡来系」弥生人の平均的形態からは、部分的にやや外れる傾向が見られた。ただ、その差異は大きくなく、図2に示したベンロースの形態距離にも窺えるように、西北九州弥生人や縄文人に較べると、明かに土井ヶ浜（金関、他、1960）や金隈（中橋、他、1985）に近い形態の持ち主と言える。また、鼻根部を始めとする顔面の強い偏平性や、脛骨が大腿骨に対して短い点なども考え合わせれば、全体的には従来より周辺域から出土している弥生人集団の類員とみなして大過なかろう。ただ、同じ北部九州弥生の中にも、例えば沿岸部と内陸に入った地域とでは、高顎性等に幾分地域差のあることが徐々に明かになりつつあり（中橋・永井、1989）、今回の例も一応はそれを追認させる結果となつたが、こうした点は今後ともさらに資料の蓄積を図った上で検討を続けるべき課題となろう。

図2. ベンロースの形態距離（♀頭蓋9項目）



今回の事例で最も注目すべきは、小児棺中に成人頭蓋のみが埋葬されていた点である。保存が悪く、頸椎の有無や切断の痕跡は残念ながら確認できなかったが、前述のように埋葬状況から見て、何等かの理由で身体から遊離した頭蓋のみを埋葬した事例と考えられる。他のはっきり確認できる類例としては、福岡県南部の筑紫野市隈西小田遺跡の、若い男性頭蓋のみを埋葬した一例があるが(未発表)、いずれにしても、当時の社会状況を窺わせる上で貴重な、極めて稀な一例となるものである。

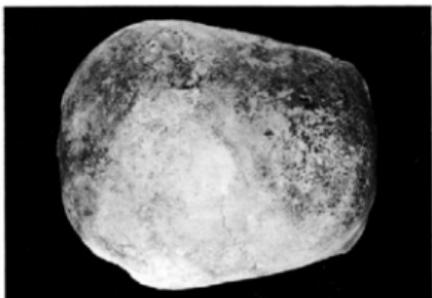
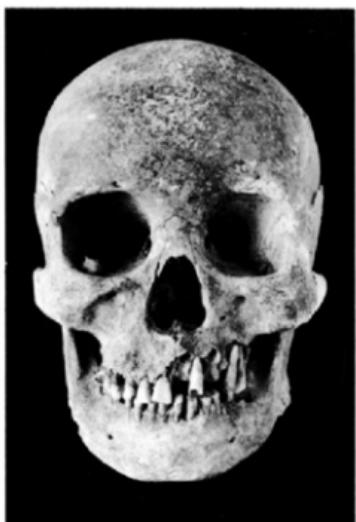
近年、吉野ヶ里や永岡遺跡(中橋、1990)、あるいは先の隈西小田遺跡など、近在の幾つかの遺跡で、逆に首の無い、身体だけの埋葬事例が増えつつあるし、また、武器切っ先陷入、供伴例の多さなどからみても(橋口、1987)、当時、この北部九州の弥生社会がかなり不安定な状況にあったことは想像に難くない。今回のような事例が今後少しづつでも蓄積されていけば、当時の社会状況や埋葬習俗など、その内実について、より具体的で詳細な検討も可能となろう。今後の類例の増加が期待される。

謝辞：当人骨を研究する機会を与えていただき、種々の貴重な御教示を頂いた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏、並びに人骨整理に当たって御助力いただいた津村美弥子氏に深謝致します。

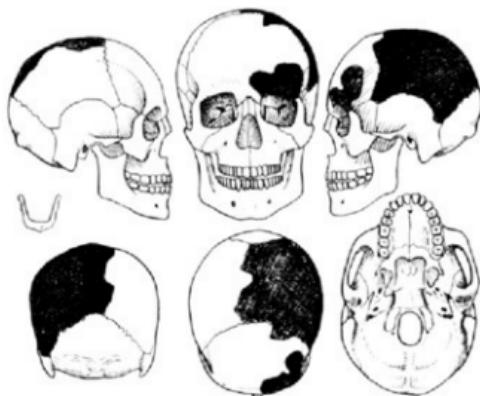
#### 文 献

- 阿部英世 (1955) : 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」人類学研究 2。
- 橋口達也 (1987) : 「集落立地の変遷と土地開拓」、東アジアの考古と歴史、(岡崎敬先生退官記念論文集)、同朋社。
- Howells, W. W. (1973) : " Cranial variation in Man " Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., vol. 67, Harvard Univ.
- 鑄錫勝登 (1955) : 「九州人下腿骨の研究」人類学研究、2。
- 池田次郎 (1988) : 「吉備地方海岸部の繩文時代人骨」、考古学と関連科学、(兼木義昌先生古希記念論文集)
- 石沢命達 (1931) : 「吉胡貝塚人骨の人類学的研究 第3部 下肢骨の研究」人類学雑誌、46。
- 金闇丈夫・永井昌文・佐野 一 (1960) : 「山口県豊浦郡豊北町上井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について」、人類学研究 7。
- Martin-Saller (1957) : " Lehrbuch der Anthropologie " Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸 (1981) : 「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書、1。
- 溝口靜男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」人類学研究 4。

- 内藤芳篤 (1971) : 「西北九州出土の弥生時代人骨」 人類学雑誌、79。
- 中橋孝博 (1990) : 「福岡県筑紫野市永岡遺跡出土の弥生時代人骨について」 筑紫野市埋蔵文化財調査報告書、26。
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) : 「山口県吉母浜遺跡出土人骨」 吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- Nakahashi, T. & M. Nagai (1986) : Sex assessment of fragmentary skeletal remains, J. Anthropol. Soc. Nippon, 94(3).
- 中橋孝博・永井昌文 (1989) : 「弥生人の形質」 弥生文化の研究1、雄山閣。
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文 (1985) : 「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」 史跡 金隈遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書 123。
- 専頭時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」 人類学研究4。
- 鈴木 尚 (1973) : 「日本人の骨」、岩波新書477、岩波書店。
- Yamaguchi, B. (1973) : Facial flatness measurements of the Ainu and Japanese crania, Bull. Natn. Aci. Mus., Tokyo, 18(1).



(1) ST-05号 (♀・老年)



(2) ST-07号 (♂・老年) 遺存部位



(1)



(2)



(3)

(1) 調査区全景（南東から）

(2) 瓦棺墓検出状況（南から）

(3) 東側扯張区（北から）



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)



(7)

(1) ST 01 (西から)

(2) ST 02 (西から)

(3) ST 04 (西から)

(4) ST 06 (北西から)

(5) ST 05 (北から)

(6) 同人骨出土状況 (東から)

(7) ST 07 (南から)



(1)



(2)



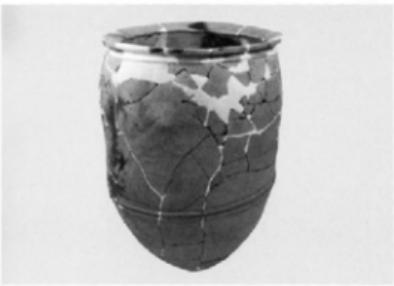
(3)



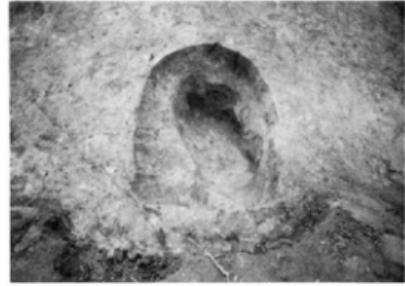
(4)



(5)



(7)



(6)

(1) SK03 (南東から)

(2) SK08 (南東から)

(3) SK10 (南から)

(4) SK12 (西から)

(5) SK13 (北から)

(6) SK14 (東から)

(7) ST01



ST04



ST05



ST06



ST07

---

---

## カルメル修道院内遺跡II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第299集

1992年（平成4年）3月13日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神1丁目8-1

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区人手門1丁目8-34

---

カルメル修道院内遺跡 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書策299集

1992

福岡市教育委員会